

ホトトギス

昭和十四年三月二十八日出版  
昭和十三年六月一日発行  
第一二四巻第六号

# ホトトギス

六月号



## 風雅の小筥（四十一）

廣太郎

新型コロナウイルスの蔓延は、この稿を認めている令和三年三月十二日の時点でも未だ収束の見込みが立っていないようにだが、漸くワクチン接種が始まり、少し光明が見えてきたのではないだろうか。相変わらず俳句の世界は、句会等の中止が相次ぎ自粛の営みが続いているが、早く座の文学としての俳句会の再開を願っている人も、私を含めて多いだろう。

ある日ホトトギス社の私の許に電話が掛かってきた。その人によると、ある定期刊行物の俳句投句欄のコメントでその選者である高名な俳人が「このコロナ禍をきっかけに『マスク』は季語では無くなりました」とおっしゃったそうだ。考えてみると、このコロナ禍では感染予防の目的でマスク着用が当たり前になった。元々マスクは冬の季題である事は俳句をなさる方ならどなたも御存知であるが、確かに令和二年は一年中マスクを着用している人が、特に日本では、外出時はほぼ全員ではなかっただろうか。俳句に詠まれる方も結構苦労されておられたようで、投句の中には「春マスク」「夏マスク」「秋マスク」なる語が多く出てきた。あくまでも句の出来によるが、季題というのは、詩歌、特に俳句では詩趣ある言葉として古今名句が詠み継がれてきて、歳時記に掲載されるという歴史を歩んできた語である。ウイルスは間違いなく収束して、マスクも従来通り主に冬に着用するものとなるだろう。季題というのは、簡単に無くなったり、反対に新季題も、簡単に出来上ったりするものでは無く、しつかり歴史を経た詩趣ある言葉なのである。

# 句日記 汀子

令和二年六月六日 菅屋ホトトギス会

短夜の祈りに心合はせたる

平凡な月日尊し青芒

紫陽花の種類と聞けばそれらしく

邂逅や薄暑の顔の揃ひたる

六月七日 下萌句会

山荘の生活なつかし火取虫

今日晴れて梅雨の近づき気配なく

昨夜咲きし月下美人といふばかり

小きて行く油断なけれど梅雨に入る

共同通信の文末に一句

太陽に心あづけて梅雨に入る

六月九日 大阪倶楽部

抜けて行く丹波の栗の花の道

疎開せし頃の通ひ路栗の花

黒南風や今日は家居の日なりけり

黒南風やいつもと違ふ日々とふ

黒南風や天気予報は今日も晴

朝日俳壇掲載のため出句

収束の近し暮しも戻る夏

六月九日 綿業倶楽部

夏野行く限り青空蹤いてくる

海よりの山よりの風薫りけり

窓開けて薫風招き入れにけり

六月十一日 清交社

十葉の花を可憐と見る時も

山椒魚ゆらりと動き生きてみし

子燕の元気を鎮めたる瞬時

この危機を乗り越えゆかん夏に入る

上流は水音高し山椒魚

梅雨に入るまだ本降りとならざるも

六月十五日 朝日カルチャー

今の世に従ひゆかん青き踏む

集ふことやうやく果たし得たる汗

六月十六日 有恒俳句会

庭師来て二言三言苔の花

友癒えよせめてあかるき五月闇

贈られしことも忘れてさくらんぼ

じつとしてぬしが消えたる蝸牛

五月闇より抜け出して句会へと

六月十六日 無名会

家居して夕立は快きものよ

夕立の予報当たるも当たらぬも

考への二転三転夕立晴

手に這はせ忽ち消えし天道虫

用意して結局夕立来ぬ帰路に

六月十七日 夏潮句会

二階より見て下さいと合歓の花

蚊の居なささうで居る庭巡りけり

何となく一段落と思ふ夏

病状を聞きて安堵の夏となる

出席の叶ひたる日の梅雨の晴

皆揃ひ得たる日の会梅雨の晴

# 廣太郎句帳 廣太郎

令和二年六月一日 「WEP俳句通信」出句

花菖蒲雨の過客でありにけり  
著我畳みよし野に夜引き寄せて  
競べ馬魅魅蹴散らして走りゆく  
ペーロンや漕ぎ手は隠れキリシタン  
オリブの花の香に着く定期船  
栗の花丹波に祖先訪ねもし  
七変化三急事態解けし君  
溝浚へ緊急事態解けし朝  
十葉に朽ちゆく庭の歴史かな  
蝶姑住みし土肥えてゆくこえてゆく  
濁鮒心濁つてをらざりし  
日も微笑める銭亀の甲羅干  
歴史的名盤徴を拭ひつつ  
雨後といふ四次元見据糸蚯蚓這ふ  
河鹿鳴く瀬音楽でるレクイエム  
一粒は神の高さにさくらんぼ  
下ろしたる夏大根に朝動く  
渋滞を忘れし道路齧の花  
子燕にドッグフアイトの如親が  
ハンガーに育まれたる鳥かな  
早苗東土間に置かれて旧家かな  
代掻いて水に会話の生れたる  
田植歌エンジン音に変わりゆく  
都会より嫁し早乙女になりゆける  
早や風に応へてをりし植田かな  
誘蛾灯点るより宴始まりぬ  
火蛾の宿虚しく夜を灯しけり

咲くものの色新緑に絡みつく  
補聴器で捉へし羽音黒揚羽  
諦める未来軽暖纏ひつつ  
六月四日 蕉心会通信句会

紫陽花の毬返り落つ羽音かな  
赤腹の裏返る時水光る  
五月闇不夜城消えて久しかり  
六月四日 カトリック新聞選者吟

軽暖を纏ひて鳩の啄める  
六月七日 野分会芦屋例会リモート句会  
八乙女の田舞に土の喜遣ひ  
霊気めく風に守宮の息遣ひ  
御田植に御座す日の神土の神  
守宮鳴く人の悪口言ふ君に  
六月十一日 土筆会不在投句

日陰恋ふ紫蘭は色を主張して  
青鷺の一步より時動き初む  
明易や孫の寝息を聞きながら  
マーラーの五番短夜司り  
六月十七日 北國文芸選者吟  
額の花山気平らに均しゆく  
六月十八日 「俳句界」出句

冬帝も畏れ待降節に入る  
罪人も降誕祭の食卓に  
神の母聖マリア祝ぐ去年今年  
寒明や二十六聖人の黙  
下萌の道行く灰の水曜日  
鳥雲に入るを見守る聖ヨセフ  
弥撒の鐘復活祭の日を弾き  
草笛の鳴れば聖霊降臨す  
聖ペトロ口聖パウロ祝ぎ草茂る

天の川仰げば聖母被昇天  
六月十八日 前議員句会  
蕊揺れて未央柳の鏡舌に  
十葉に庭園の香を明け渡す  
本音とは五月雨傘を閉ちてより  
鳴くものは五月雨傘を閉ちてより  
六月十八日 登高会

議事堂へ続く曲線蟻の道  
紫陽花の赤に始まる日曜日  
水嵩に戸惑つてゐる夏の川  
子の零すお菓子に聴き蟻の道  
六甲の風と存問蟻の道  
七変化心変りは君の常  
六月十九日 廣邦会

五月闇払ひ集へる句友かな  
明日の色秘めて七変化の憂ひ  
橋桁を洗ひ上げた夏  
六月二十三日 若水句会不在投句  
竹の皮脱ぐ明日があること信じ  
人と距離保ち茅の輪をくぐりけり  
遠出せぬことにも慣れて明易し  
六月二十四日 目黒学園句会

梅雨晴を引き寄せてゐる子等の声  
百幹の若竹風を操れる  
若竹に繞る重さのありにけり  
明日の夢襖はづして見てをりぬ  
五月晴都心に菜の戻り来る  
六月二十八日 野分会東京例会リモート句会  
御田植や住吉さんは閉ざされて  
家の玻璃知り尽したる守宮かな  
守宮鳴く闇整へてゆきにけり

# 雑詠

## 廣太郎 選

チエロを聴く霜夜の星の瞬きに 福島 加藤あけみ  
 おはやうと書く霜晴の窓硝子 同  
 松過の大海原へ濤を曳く 同  
 新年を神の一灯もて照らす 袋井 湖東紀子  
 押さへても風の湧き出す落葉籠 同  
 根元まで分け入る日差竜の玉 同  
 魂を射られて痛し寒の月 東京 岩村恵子  
 天地に響く静寂や寒の月 同  
 華麗なる白と云ふ色深雪晴 同  
 盛り塩の透けて崩れて夕時雨 渋川 木暮陶句郎  
 辛子にも恋にも泣いておでん酒 同  
 下戸なれど鱈酒に火をつけもして 同  
 雪解を待つスパイクを磨きをり 神戸 藤井啓子  
 比叡より比良のしろがね猫柳 同  
 東京に出る子三人雪解村 同  
 雪見酒ことんと屋根を退る音 同  
 冬薔薇白きつばりと咲いてをり 同  
 追悼の二十六年灯の冴ゆる 同  
 同 山田佳乃

大試験母の祈りの長かりし 東京 山田閨子  
 寡黙な子なほも寡黙に大試験 同  
 寒の月皓々たるに祈ること 同  
 力尽きつつ凍蝶の魂重し 西宮 本郷桂子  
 凍蝶に情をかけし悔いの指 同  
 氷張る確かな闇の緊張に 同  
 少女らのきらきら笑ふ更衣 東京 今井肖子  
 かはほりのかすめていよ、闇となる 同  
 うつくしくさびしく繭のかがやきぬ 同  
 春浅し芸には師弟てふ縁 神戸 和田華凜  
 大鳥居抜ける近道宮の春 同  
 藤十郎 偲ぶ夕霧二の替 同  
 木々枯れてゆく星空を見せるため 静岡 須藤常央  
 虚子句碑とあり武蔵野の枯木立 同  
 寒林の果の一灯遠からず 同  
 久々の出社三寒なりし日に 京都 山崎貴子  
 不自由な暮しの中に春立ちし 同  
 立春といふ言の葉に弾みあり 同  
 早春や山に雑音増え始む 東京 田丸千種  
 磯焚火潮より現るる女どち 同  
 大琵琶に人の手跡の舳挿され 同  
 冬帝や夜の風音を先立てて 同  
 寒晴の空へと星座めぐりくる 同  
 雪になるやも知れぬ夜の音絶えて 同  
 同 龍ヶ崎 今橋真理子

## 雑詠句評（五月号より）

大綿も庭の花鳥として飛べる 徳島 岩田公次

独楽つひに笑ひ転げて眠りけり 津 中杉隆世

ともすれば陳腐になってしまう擬人だが、的確かつ軽妙にリズムよく仕立てれば佳句になるのだ、とあらためて感じさせてくれる一句。中七から下五はもちろんなるほどと思わせるが、つひに、の一語により、回り続けている独楽の美しい姿とそれがだんだん限界に近づいてくるまでの様子も見え、巧みである。

（肖子）

正月の遊びの代表的なものの一つである独楽は色々な種類があるが、紐を軸に巻いて、投げるようにして地上で回すのを結構見たり実際にやった思ひ出がある。その回り始めから転んで止まるまでの景だが、その様子を人間の笑いに例えたところが秀逸である。生き生きと独楽が描けた。（廣太郎）

「大綿（おおわた）綿虫（わたむし）の事である。カメムシ目アブラムシ科の昆虫の一群の総称、初冬白い索状の分泌物を纏って浮遊する。雪国では、雪虫、雪婆（ゆきばんば）とも言われている。只雪解けの二月頃現れ羽化するカワゲラ、ユスリカ等も「雪虫」と言われているが別の類である。

掲句は、大綿を「庭の花鳥」と詠んでいる。「花鳥」とは、自然の美の代表、花を見鳥の声を聞く風雅な心とある。初冬の閑寂の中を飛ぶ白一色の小さな命を愛しんでいるのである。

アブラムシは、果樹や野菜にとつては最も厄介な害虫である。「大綿」は交尾し子孫を残すために羽を得て浮遊するのである。それを愛するのは物好きな俳人くらいであろう。（青天子）

初冬の風もなく穏やかな日に、まるで塵のようにふわふわと目線の高さに浮いているのが綿虫であり、大綿は少し大型で青みがかった。確かに羽で空を飛んでいる動物で、何か仄々とした雰囲気を醸し出しているが、この小さな生き物も大自然を形成している一つなのである。（廣太郎）

天地有情

子選

蝸や三瓶の哀史包み込み  
 夕星に蝸いよよ昂れる  
 焚火よく燃ゆる証拠の薄煙  
 なき妻の部屋や玻璃戸の寒の月  
 ごごえみしあの日あの夜寒の月  
 冬ばらに埋もるる幸にあやからん  
 うすくともあれば冬日に励まされ  
 冬めくと大事なきかと娘のメール  
 天上の祈りのやうにしぐれけり  
 稜線に朝日射しくる寒卵  
 いつも熱出して寝かされ屏風の絵  
 寒椿電車が過ぎるとき紅し  
 初富士の小さく浮む町に住む  
 返信に返信の来て春隣  
 かりそめの日をまとひたる寒椿  
 をさまりし風大寒の星の数  
 春隣乗り合せたる能楽師  
 小気味よき鼓の音よ二月かな

東京 稲畑廣太郎  
 同  
 長岡 安原 葉  
 同  
 神戸 三村純也  
 同  
 相模原 木村享史  
 同  
 熊本 岩岡中正  
 同  
 東京 今井千鶴子  
 同  
 龍ヶ崎 今橋眞理子  
 同  
 東京 山田閨子  
 同  
 神戸 和田華凜  
 同

比奈夫句碑裾の水仙一つ咲き  
 ポスト迄日脚伸びしと思ひつつ  
 懐しき焚火の匂ひ全身に  
 寒の月きりりと統べてをりし闇  
 蓄へし力一氣に寒椿  
 落ちてなほ心にひとつ寒椿  
 殊の外今宵の星の冴返る  
 名は知らぬままに馴染みし犬ふぐり  
 ちちははの習はしを守る松の内  
 嫁ぎきて六十年の味噌雑煮  
 飼犬の方がよく知る枯木道  
 風除にあらず大事な虚子屏風  
 背伸びして梅一枝を手折る吾子  
 白梅や筵の狭き祖父もゐて  
 籠り居てこそ初音でありしかな  
 信仰の自由に暮し絵踏ふと  
 大雪や車道歩道を皆消して  
 休校の子ら応援の雪卸

鎌倉 星野 椿  
 同  
 芦屋 黒川悦子  
 同  
 東京 岩村恵子  
 同  
 同 高濱朋子  
 同  
 西宮 本郷桂子  
 同  
 加須 岡安紀元  
 同  
 淡路島 木下圭子  
 同  
 宝塚 水田むつみ  
 同  
 東京 河野昭彦  
 同